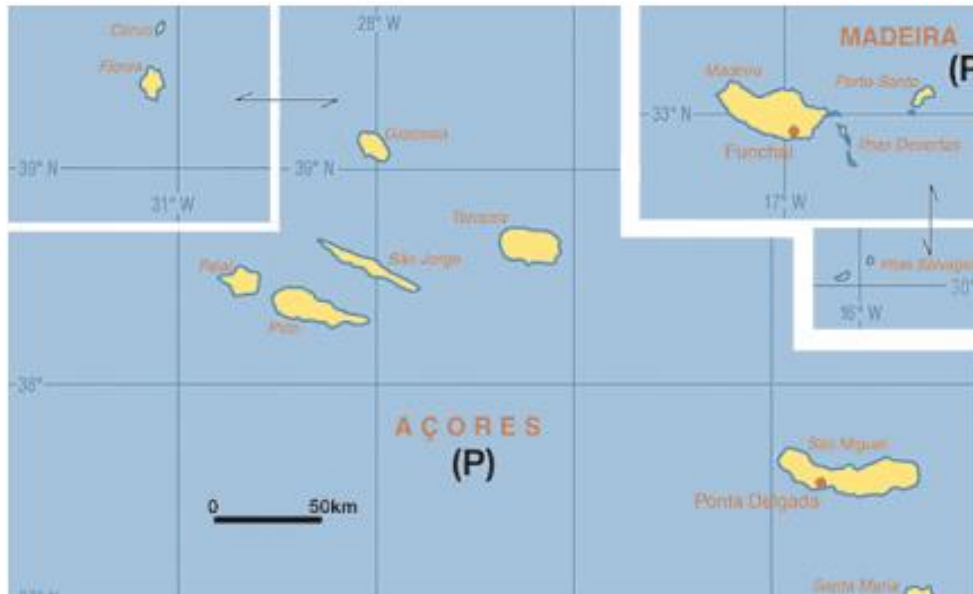
最後のマッコウクジラハンター
北大西洋で。

クロードパケ

「多くの捕鯨船がアゾレス諸島からやって来て、ナンタケットからの船がこれらの岩だらけの島の強い農民と一緒に乗組員を熟考するために錨を下ろします…理由はわかりませんが、最高の捕鯨船が採用されるのは島民の一人です。 「」（ハーマン・メルヴィル、白鯨、1851年）

朝の6時、夜明けが明けて、岸壁を渡ります。二人の男が反対方向に同じ旅をし、私たちはすれ違う。儀式の「ボンディア」は笑顔で交換されます。犬だけが本当に活発に見え、足の間に銃口を持って食べ物をたゆまず探しています。

七時、太陽が地平線に昇る。今では10人以上が落ち着いておしゃべりしながら歩き回っています。風化した顔に毛むくじゃらの白いあごひげを生やした男が、深い緑色の目で私をじっと見つめています。突然、爆竹が爆発します。それは一般的な陶酔感であり、私たちは背中を軽くたたき、握手し、ほとんどパーティー

です。今朝はマッコウクジラ狩りがあります。展望台は海岸から数キロ離れたところにあるものを見つけました。帆走捕鯨船が進水します。私を除いて、それは活気に満ちています、私はまだ待っています。

古い、無精ひげを生やした、無情な、私を見て、彼の永遠のお尻から最後の一吹きを取ります。ここでは、彼は最も尊敬されている人であり、「マスター」、マスターと呼ばれています。40年以上の狩猟経験。私たちはボートに彼以上のものを期待しています。片方の手を船体に置き、もう片方の手で十字架の印を付け、もう一度私を見て、承認をうなずきます。だから私も狩りに参加します。

マッコウクジラから約0.5キロ離れたところにあるモーター捕鯨船の底に緊張して倒れ込みます。ほぼ瞑想的な沈黙がインストールされました。今後、ジェスチャーは言語になります。世界のほぼ中心である北大西洋で失われた島々のグループであるアゾレス諸島のファイアル島の首都であるオルタの港を出発します。これらの火山玄武岩の島々は自然の呪文であるため、すべてに謎が染み込んでいます。生命が伝統の先祖代々の純粋さで維持され、自然がそのすべての魅力を維持している場所で、魔法の停止。

1832年以来、アゾレス諸島は常に同じ方法でマッコウクジラを狩っています。これはバスク人から学び、狩りというよりは人種のように見えます。北大西洋の波と荒波の間を滑ってマッコウクジラに追いつき、マストを腕の長さで持ち上げ、帆を上げ、静かに近づき、マッコウクジラを肺に投げ込み、引きずられる必要があります。そして、完全に使い果たされるまで、モンスター、真の水生ロデオに翻弄されました。そして何よりも、他の島々からの他の捕鯨者に先んじて、クジラ類を追い求めています。したがって、狩猟は、日本、ノルウェー、ロシアの捕鯨工場によって行われるものとは大きく異なります。これらの工場は、高度な技術のおかげで、この産業をほぼ完全に独占していますが、それでも禁輸措置がとられています。

歴史的に、アゾレス諸島での捕鯨は1760年に始まりました。それは、ネイティックインディアンから技術を学んだアメリカ人によって導入されました。1年で、アゾレス諸島は、クジラ類を探している60人以上の捕鯨者にとって、最も重要な途中降機、供給、狩猟の場になりました。外国の独占のために、マッコウクジラ狩りは島民にとって本当に有益ではありませんでした。したがって、この狩

猟艦隊と競争することができなかったため、アゾレス諸島はより経済的なタイプのボートを開発しました。

1894年、ピコ島の住民であるマルケッロは、美学と実用性を兼ね備えた傑作である群島の最初の典型的な狩猟船を建造しました。
「これまで海に出航するのに最も完璧な水上船です」と海洋学者のロバート・クラークは書いています。長さ10〜12メートル、ガフウィングとジブを備えたアゾリアン捕鯨船は漕ぐことができます。それは5メートルなので、それは本当のツアーデフォースです。後部の「マスター」を含む7人の男性が乗船しており、その任務はボートを操縦してラインを制御することであり、先頭の漕ぎ手は銛を兼ねています。セメントブロックのように短くて巨大なこれらのハンターは、ハーマンメルヴィルの有名な白鯨の背景となった幻想的な時代の最後の生きた目撃者です。

狩りのシナリオは常に同じです。夏には、海岸沿いの展望台に展望台を設置し、海をスキャンしてマッコウクジラの群れの到着を見つけます。これらの見張りは信じられないほどの視力を持っており、ほとんどが経験豊富な元ハンターです。

クジラの水流を見つけることができ、この噴水の水量から種のサイズを決定することさえできます。クジラが見つかるとすぐに、見張りは村人に警告するためにごちそうの日のように爆竹を発射します。ハンターたちは、モーターボートである「ランチャ」に曳航された捕鯨船で狩猟エリアに駆けつけます。導入された2つの最新のイノベーションは、モーターボートと無線電話だけでした。動物から約300メートルのところで帆が上げられ、大西洋のジェットコースターの間で狩りが始まります。ボートの船首に立って、熱狂的な銛は直角を待って、三角形の先端を持つ5〜6フィートの長さの槍を投げます。負傷したマッコウクジラは恐ろしい速度で潜水するため、火がつかないようにラインをスプレーする必要があります。10時間の不確実な戦いが始まったばかりです。いくつかの勝利があれば、同じくらい多くの敗北もあります。時には、より狡猾なマッコウクジラが、銛が海の深海に投げ出されて姿を消す前に潜水します。また、銛がクジラの肺に穴を開けなかったため、船長の命令により、8時間の闘争の後にロープを切断する必要があります。夫や息子が無傷で土地に触れるのを待っている不安な女性の視線の下で、私たちはしばしば疲れ果てて手ぶらで港に戻ります。

クジラの体はモーターボートでArmacoesBaleeiras ReunidasLtd。の工場に曳航されます。ピコ島で。長くて鋭いヘラで武装した海の肉屋は、油を取り除くためにオーブンに運ばれたベーコンの大きなストリップを切り刻みました。熱の影響で、大釜のベーコンは油に変わります。次に、製錬所は油を水に注ぎ、油を冷却

して精製します。油の比重は水よりも低く、不純物が底に沈む間、油は表面に浮きます。次に、ふるいに注ぎ、樽に入れます。他の労働者は、鯨ひげを生やしたクジラの上顎を切り離したり、マッコウクジラの象牙の歯を集めたりするために働いています。

夜が明けると、カフェが活気づきます。その日の狩りは上下し、誰もが自分のコメントを持っています。「アグアルディエンテ」の蒸気が空気に香りを付けます。8時に激しく話し合い、10時にこの液体殺虫剤の影響でハエのように倒れます。そしてそれは良いことです、私たちは1日24時間死の考えで生きることはできません。ですから、私たちは危険を忘れなければなりません。最初から狩りで亡くなった120人の友人を忘れなければなりません。明日はまた始まることを忘れて…多分。

（1981年3月13日にモントリオールの新聞Le Devoirに掲載されたレポート）

クジラ類と人間。

捕鯨とその肉、脂肪、骨に由来する製品は、私たちの歴史の中心です。当初、海の狩猟は主にイヌイットの所有物であり、クジラ、イッカク、シロイルカ、セイウチ、アザラシの5つの種に依存していました。イヌイットは海岸沿いにとどまり、絶対に必要なアザラシやクジラを狩りました。アザラシとセイウチの生肉は、彼らが自分自身を養い、犬の群れを養うために不可欠でした。長いカヤックや防水ブーツ、ストラップ、ヒッチを作るための肌。彼らが使用したクジラからは

、油と肉に加えて、犬ぞりのスケート靴の裏を彫った固い骨が使われていました。クジラのそびえ立つ骸骨は家の骨組みとして使われ、鯨ひげは漁網や弓矢の製造に使われました。

12世紀から14世紀の間、レバスクはバイヨンヌとビルバオの間の海岸に沿って捕鯨を行っていました。ビアリッツは3世紀の間、バスク捕鯨者にとって最も重要な港でした。バスク人は成功と需要と供給の増加に勇気づけられ、公海でクジラを追いかけ始めました。そのため、バスク人はヨーロッパの海岸を北上し、1412年にアイスランドに到着しました（ルスポリ）。バイキングの島民と彼らのサガと接触して、彼らは確かにクジラが避難するであろう神話上の土地、ヴィンランドの存在を知りました。アイスランドからアメリカまで、これらのベテランの船員にとって簡単なステップは1つだけです。歴史的に認められたデータによると、ヴァイキング（北欧）は9世紀にスカンジナビアからアイスランドとグリーンランドに移動し、その後ラブラドール海岸と地球の新しい島に到達するために西に探索を続けました。当分の間、そして他の方法で証明されるまで、ヘルランドはバフィンランドになり、マークランドはラブラドールになります。バフィンランドは鷹狩りで最も貴重な鳥、つまりシロノスリを提供し、ラブラドールは必要な材木を提供しました。ヴィンランドは、有名な赤毛のエイリークの息子であるレイフエリクソンが、1000年頃に、多産と認められている地域の中心部に、レイフスブディールと呼ばれる小さな交易コロニーを設立したアンスオーメドウズ（ニューファンドランド）に位置します。クジラとタラで。

一部の歴史家は、ヴァイキングの後のバスク人もクリストファーコロンブスの前にアメリカを「発見」し、この発見を秘密にして、タラの釣りと捕鯨の独占を守りたいと考えていたと考えています。バスクの船員は国に奉仕する探検家でも植民者でもありませんでしたが、商業活動に従事する漁師でした。したがって、繁栄する海路を秘密にしておくことが重要です。（Jean-Pierre Proulx、1986）

1526年頃、6月から8月にかけて、セントローレンス湾と河口でクジラを狩るために数十隻の船がバスク地方を離れました。ラブラドールとニューファンドランドの海岸、ベルアイル海峡に向かって、考古学者は「バレイン」オイルの処理の

ためのバスクオーブンの存在を示す遺跡を発掘しました。バスク人はセントローレンスの北海岸の探検を続け、1550年からミンガン群島の海域でクジラを狩りに来ました。19世紀の終わりに、プイジャロンの伯爵は彼の日記に構造物を記しました。　1970年代にルネレベスクによって行われた考古学的発掘がバスク人によるイルヌエとイルデュアーヴルデミンガンでの窯の使用を確認している間、石積みの。大河の南岸にあるバスク島は、1580年から1860年にかけて、クジラとアザラシの油を処理するための最も重要な中心地になりました。南岸のバスク島は、北海岸のサグネの河口にレ・ゼスクマンとタドゥサックがあり、カナダの海岸の内部で最も多作な海上捕鯨の三角形を形成しました。

ノルマン人、ブルトン人、ロケロア人は50〜100トンの船を持っていましたが、バスク人は40〜70人の乗組員が乗せた200〜400トンのキャラベル船を使用していました。船上では、船底が平らで縁がフレア状になっている長さ20〜30フィートの3〜6隻の漁船（タラ）または捕鯨船が乗組員の作業に使用されました。彼らが開発した先祖代々の技術は1980年まで続きました。かつて、斑点を付けられたクジラ、捕鯨船、長さ8m、30c、幅1m、幅80c、そしてその乗組員：5人の漕ぎ手、操舵手、銛が獲物に向かって航海します。動物から200メートル離れたところで帆を下げ、銛ができるまで漕ぎ手が引き継ぎます。肺を突き刺す最初の打撃の後、ダイビングを遅くして動物を疲れさせるブイで2番目の銛が発射されます。上昇するたびに、クジラは死ぬまでダーツとジャベリンで再び打たれます。陸に持ち帰り、クジラを屠殺し、ベーコンをオーブンに入れて溶かした脂肪を集め、細かいふるいに注ぎ、油を樽に入れます。（ベランジェ、1971年）

油を準備するためのストーブを作ることに加えて、彼らは太陽にさらされることによってタラを乾燥させるためにそこに足場を建てました。バスク人は、フランスの嫌悪者がますます要求する毛皮と引き換えに、製造された製品を交換した最初の人の1人でした。これを行うために、彼らはヨーロッパから何百もの金属物体を輸送します：ナイフ、斧、調理鍋だけでなく、ガラスビーズと衣類も。最初、バスク人はエスキモーを心から扱いました。しかし、1610年、トロイ戦争のように、エスキモーの首長の妻が誘拐され、粉に火がついた。世紀を通して、バスク人は自分たちを守り、エスキモーの侵入から船を武装させなければなりませんでした。一方、レジューヌ神父は飢饉の最中に若いバスク人が彼らに食べられたと報告しているが、関係はアメリカ先住民との友好関係を保っていた。その後、1636年頃、スペインとフランスの間の戦争により、バスクの船と乗組員が徴用されました。オランダ人は捕鯨の技術を学ぶためにバスク人を雇う機会を得ました。わずか数年で、強力なNoordsche　Companied'Hollandeはグリーンランドとスピッツベルゲンでの狩猟を独占しました。アムステルダムは、石油とクジラの最も重要なヨーロッパ市場になります。

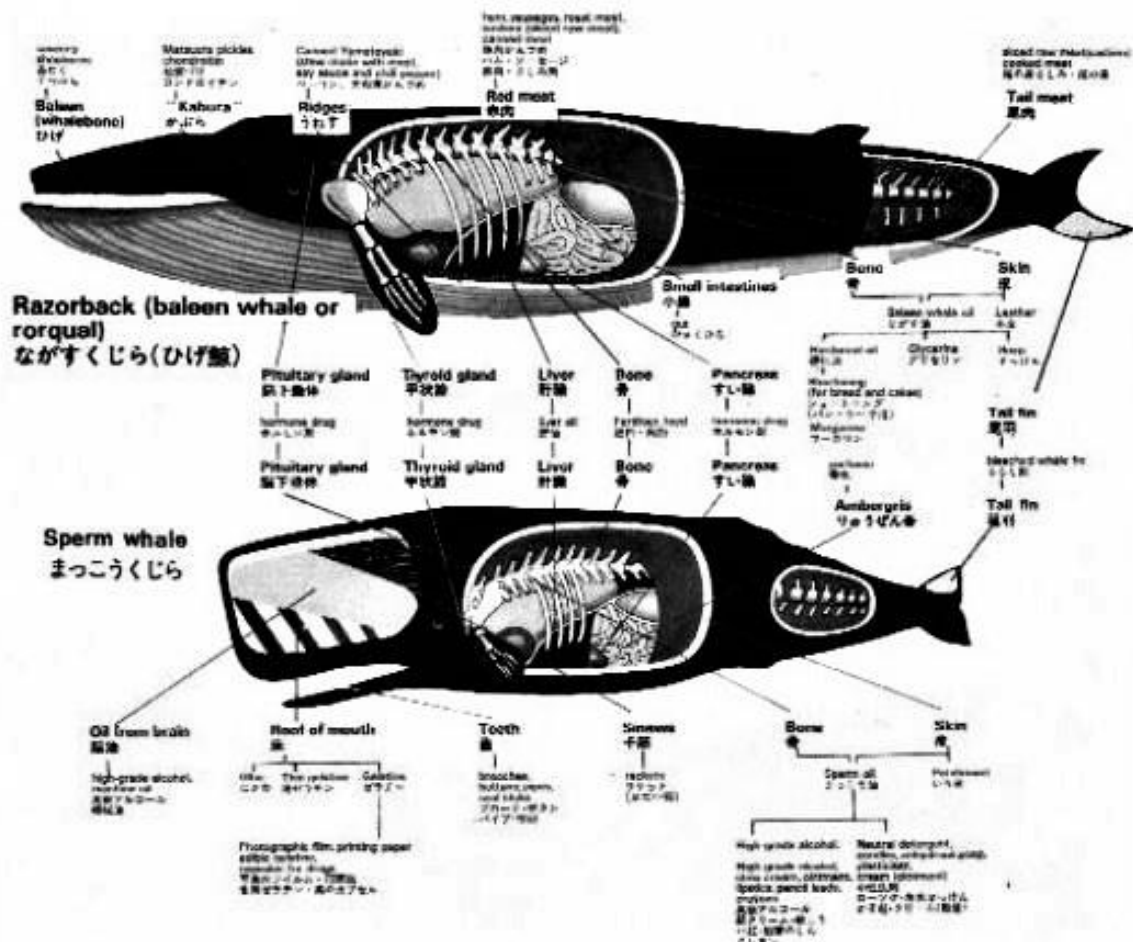
1685年、バスク地方には721名の経験豊富な船員しかいませんでしたが、その強さはわずか18隻でした。その後、1700年頃、バスクや他の捕鯨者の大多数がセ

ントローレンス湾を離れ、現在グリーンランドに集中しているクジラの群れを追いかけました。（Frenette、1996;Bélanger、1971）。その後、捕鯨者たちは移動の旅でクジラがたどったルートをたどり、イヴァン・T・サンダーソンはこう言いました。クジラをたどることで、西側は惑星を発見して征服しました。

1688年頃、アメリカ植民地の経済状況を調査するためにアメリカにやってきたイギリス国王の使節は、ビーバーやその他の搾取された毛皮動物の数が減少した後、捕鯨を東海岸諸国の経済エンジンにすることを推奨しました。　。実際、鯨油は、当時完全に拡大していたアメリカの家や都市を照らすために利用できる唯一のエネルギー源でした。1748年、捕鯨と石油貿易はアメリカの経済成長の強力な要因となり、この繁栄するビジネスの中心は、ハーマンメルヴィルの有名な白鯨に影響を与えたケープコッド沖の島、ナンタケットにありました。海の暴君と対峙し、クエーカーの宗教派によって聖書の邪悪なリヴァイアサンと評された精子捕鯨。しかし、この大悪魔は、彼の最大の不幸に、象牙の歯などの前例のない富を持っていました。アンバーグリスは、調香師や鯨蝋、またはクジラの白に非常に人気があり、キャンドルメーカーにも切望されていました。（Cazeils、2000）確かに、クジラの白は美しい炎を最も鮮明で明るいものにし、化粧品業界がマッコウクジラの龍涎香の麝香の香り、特に自然を固定するその巨大な力を発見した間、その名声は記録的な速さで世界中に広まりましたエッセンス。

実業家が新しい商品を開発するにつれて、クジラは非常に人気が高まっていました。1780年頃のオランダとイギリスの間の戦争は、両国の捕鯨産業に致命的な打撃を与え、アメリカ人が順番に支配することを可能にしました。大規模な石油トレーダーは、トレーダーによって市場にもたらされた革新から大きな利益を得ました。1850年までに、捕鯨船団は70,000人以上の男性を雇用しました。動物の80%がアメリカの捕鯨者によって捕鯨された捕鯨の偉大な期間は1900年頃に終わった（McHugh、1974）

クジラの脂肪は調味料として機能し、揚げ物に使用されました。肝臓と舌が最も愛され、ローストされて食べられました。肉は動物向け食品として使用されました。このオイルは、口紅やその他の化粧品、ニトログリセリン、塗料顔料、印刷インキ、殺虫剤などのワニス、ワックス、不凍液、透過油、ゼラチンなどの優れた石鹸やその他の製品に加えて、時計のメカニズムやその他のモーターの優れた潤滑剤になりました。　。骨、革、特に鯨ひげも、さまざまなオブジェクトのホストを作成するために使用されます。長さ5〜6フィートのクジラのペニスはゴルフバッグに変わりました。帝国がその背後に形成された今日の石油の時代と同じクジラの時代をかつて話すことができるほどです。ろうそくの会社、ムスクの製造業者、薬、傘、ブラシ、コルセット、ボタン、そしてより芸術的には、マッコウクジラとホーンカッターの象牙の彫刻家について考えてみてください。

ただし、この点で日本は例外です。欧米では、いくつかの宣伝キャンペーンにもかかわらず、1947年のイギリスのように牛肉が不足した場合を除いて、ヨーロッパとアメリカでは鯨肉はほとんど消費されていません。ノルウェーの会社コスモスだけがそれの市場を作ることに成功しました。鯨肉動物飼料の形で。シロナガスクジラは犬や猫を養うために駆除されました。日本では、シーフードに焦点を当てた食習慣が鯨肉に牛肉の消費に取って代わる独特で高く評価されている食品の地位を与えているのとは異なります。

クジラのすべての部分が使用されて食べられます、日本人は何も無駄にしません。尻尾の付け根からのおいしいお肉であるオノニーは、主に刺身のみじん切りに使用され、生で食べられます。背中と腹の赤身の赤身はグリルに使われるか、ムナニク（胸）とアブラスノコ（ひれ）を混ぜたハムとソーセージに変身します。スノコ、顎と腹の間の溝からの肉と脂肪がクジラのベーコンを形成します。油中の脂肪酸はマーガリンを形成します。最後に、コヒゲ（ガム）、フキワタ（肺）、キャクヒロ（小腸）、ママワタ（腎臓）、タケリ（ペニス）、カブラボーン（鼻軟骨）がプライムカットと料理です。（板橋、1986）

皮肉なことに、クジラを完全な絶滅から救ったのは1851年の石油の発見でした。鯨油を燃料として徐々に置き換え、石油、主に灯油が新しい時代を迎えました。鯨油の価格は下落しましたが、運営費は上昇しました。捕鯨船は1つずつ他の事業に割り当てられるか、単に廃棄されました。20世紀の狩猟の復活は、ノルウェーのSwend Foynによる捕鯨砲と爆発物の頭部の発明に対応し、とりわけ、1925年に、後部に傾斜した傾斜路を備えた工場船が登場し、海の大オデッセイの拡大を可能にしました。すべての北極海と南極海で。このような工船は、1回の釣り旅行で2,000頭以上のクジラを扱うことができました。その日からノルウェーは重要なプレーヤーになり、数年以内に世界中に狩猟ステーションを設立しました。早くも1913年に、シャルコット博士は警鐘を鳴らし、クジラの恥知らずな大虐殺を公に非難し、若い子牛の保護を確保し、保護区域を確立するための国際協定に迅速に署名することを要求しました。（Cazeils、2000）

第一次世界大戦の経験は、脂肪の供給がドイツのアキレス腱であることを示しました。ヒトラーはその教訓を理解し、1933年に捕鯨船団を建設する意向を発表しました。すべてのパン屋とレストランは、1935年に鯨油を含むマーガリンの使用を余儀なくされました。この法令は、ナチスドイツが戦時経済を確立していることを明確に示していました。

第二次世界大戦中、鯨油の必要性は、植物性脂肪の不足を補うためだけでなく、特に鯨油が業界で爆発性のニトログリセリンの製造に不可欠であるために非常に増加しました。記録的な年である1938年には、55,000頭のクジラ類が殺されました。発表された虐殺に直面して、1946年に国際捕鯨委員会が設立されました。それは実際、第二次世界大戦の深刻な影響を受けた捕鯨産業の再建を目的とした捕鯨クラブです。何年もの間、この委員会はクジラの絶滅のリスクに関する独自の科学顧問のアドバイスを無視しましたが、アイスランド、ノルウェー、ソビエト連邦、日本のような国は権力のない組織によって布告された無害な制裁を無視しました。大型鯨類の商業的狩猟を禁止するモラトリアムが、人口に十分な情報を与えられたためにますます懸念される政府からの圧力を受けて、1986年になってからでした。

委員会は当初から、環境保護論者が主張する種の保護要件ではなく、経済的配慮の影響を受けていました。19か国がこれを順守し、割当を設定していますが、それを強制することはできません。今日、ノルウェーや日本のようないくつかの国は、実際には偽装された商業捕鯨であるにもかかわらず、科学的研究と研究の名目で商業捕鯨に対するモラトリアムを回避しようとしています。クジラの生存のための戦いはまだ終わっていません。2006年10月17日、アイスランドは商業捕鯨を再開する意向を発表し、数日後、最初のクジラが殺され、屠殺されました。すべてを最初からやり直す必要があります。

クジラは私たちにとって野生の世界の象徴です。しかし、クジラ、イルカ、キラークジラ、ポルポイズ、ベルーガクジラ、マッコウクジラ、クジラは「文明化された」存在であり、歌や音楽を知り、洗練された言語は言うまでもなく、開発された言語で互いにコミュニケーションを取ります。

それでも、私たちは自分の惑星よりも他の惑星や銀河に知的な存在が存在することを考える傾向があります。そのようなシナリオが現在地球上で展開されていることに気付かずに、パラレルワールドと銀河文明の物語を作り上げたSF作家は何人いますか？

「おそらく私たちは今、人間とは完全に別の新しいカテゴリーの動物を確立する必要がありますが、知性、社会組織、そして人間に匹敵する意識を与えられています。この可能性を受け入れるのに十分な謙虚さがあれば、おそらく私たちは人生を理解する新しい時代の先端にいることに気付くでしょう。」（Horace Dobbs、1977）

クジラ類は、さまざまな人間の文明のすべての伝説に存在しています。イヌイットにとって、男性は性的活力を象徴し、女性は養育者で保護的な母親を象徴しています。古代ギリシャ人の間では、クジラ類は神々と擬人化された美徳、男性の愛と生きる喜びに直接関係するメッセンジャーであったという伝説があります。ローマの学者であるプリニー・ザ・エルダーは、友情と忠実さのしるしの下で、男性とイルカの間のこの関係を記しています。ポリネシアの人々はまた、広大な太平洋を越えて肥沃な島々にイルカを導き、マオリの航海士をニュージーランドの海岸に背負ってサイクロンに溺れるのを防いだので、イルカを尊敬しています。カナダのインカ人の間でもペルーのインカ人の間でも、いくつかの神話では、シャチやキラークジラの強さと勇気が強調されています。ブリティッシュコロンビア州のインディアンであるヌートカの伝説によると、超自然的な力に恵まれた白いオオカミがシャチに変わったということです。その日以来、キラークジラは白く発見され、オオカミのように群れをなして移動しています。イスラムの伝統では、クジラは水に浮かぶ地球を支え、世界の創造の基礎となる存在です。それが動くとき、その動きは地震を引き起こします。（クジラとイルカ、エディションElsa、1998年）

参考文献。

BÉLANGERRené（Mgr）、セントローレンス河口のバスク人、ケベック大学出版局、モントリオール、1971年。

CAZEILS Nelson、10世紀の捕鯨、ÉditionsOuest-France、レンヌ、2000年

DOBBS Horace、Follow a Wild Dolphin、Souvenir Press Editions、ロンドン、1977年

FRENETTE Pierre、コートノールの歴史、Les Pressesdel'UniversitéLaval、ケベック、1996年

板橋森国、食用鯨肉、概観、日本捕鯨協会版、東京、1986年

MCHUGH、JL、The Whale Problem、The Role and History of the International Whaling Commission、William E. Schevill Publishing、Harvard University Press、Cambridge、1974

PROULX Jean-Pierre、北大西洋での捕鯨、パークス-カナダ出版、オタワ、1986年

SANDERSON Yvan T、Follow the Whale、Cassel Publishing、ロンドン、1958年

WILLIAMS Heathcote、Des baleines、ÉditionsAubier、パリ1988